

中国空軍ニュース：J-20 は滄州に配備

漢和防務評論 20180605(抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

中国初のステルス機 J-20 は、当初実験用に 2 機、鼎新基地（甘肅省酒泉市）に配備されましたが、その後河北省滄州基地において、実戦配備されるようです。

同基地では J-20 の訓練大綱を作成し、戦法研究も行われる、と。

現在同基地には新たに 6 個の格納庫が建設されており、そのなかに J-20 が入っているはず、と KDR は推測しています。

KDR モスクワ特電：

中国初のステルス機 J-20 が滄州（河北省）に配備され始めた。この点は予想通りだった。滄州は飛行訓練実験基地として、先進型航空機は、まず最初にこの基地に配備され、訓練が行われ、J-20 の訓練大綱（訓練基準、教範など）が作成される。早期の J-10A、SU-30MKK も最初にこの基地に配備された。現在、この基地は作戦機が増加し、J-10B/C 及び J-16 シリーズがすでに配備された可能性が極めて高い。20 個の格納庫が 2004 年以前から存在していた。現在、これらの格納庫だけでなく、エプロン地区も各種の作戦機で満杯になっている。少なくとも 21 機の J-11B/16 或いは SU-30MKK 戦闘機が見られる。

KDR は、2017 年 6 月から滄州に大規模土木工事が始まり、新たに 6 個の格納庫が建設されたことに注目していた。これらの格納庫は密閉式ではないが、現在この格納庫に J-20 が入ったと見られる。

この前に 2 機の J-20 が鼎新に配備されたが、鼎新基地は空軍の実験基地である。空軍内部では第 1 試験区と称している。ここでは武器のテストが行われる。2003 年には合同戦術訓練センターが建設され、電子戦に関するテスト、多機種協同作戦等の訓練が行われている。

一連のテストが終了したあと、空軍の新型戦闘機は滄州に配備されることになる。

歴史的に見ても、滄州基地と鼎新基地には任務に違いがある。この 2 者はソ連の専門家が選定し、計画したものであり、当然状況はよくわかっている。

ソ連の軍事顧問は、滄州に詳しかった。滄州はソ連の LIPETSK 基地に相当する。ソ連の LIPETSK 基地は、1925 年に建設された。この基地は全ての最新型戦闘機、前線爆撃機が本格的に就役する前に訓練し、教材等を作成するために存在した。この意味から言えば、この基地は戦闘部隊に属し、作戦能力を有する。したがって中国の官側報道が、J-20 を実戦配備した、と報道したのは虚偽ではなかった。中国空軍の訓練体制は、ソ連の専門家の支援により建設された。当然ロシアに類似しており、米国とも類似している。米国ではネリス空軍基地に相当する。

正確に言うと、滄州と LIPETSK 基地の任務は同じである。すなわち：戦闘部署と再訓練（COMBAT EMPLOYMENT AND RETRAINING）である。旧ソ連においては、LIPETSK 基地は第 4 訓練区と称された。したがって中国空軍の事実上の第 4 訓練区は滄州である。前の 3 つの訓練区は現在すでに合併した。鼎新基地は元の第 1 訓練区である。このように見ると、中国空軍とソ連空軍の訓練体制がよくわかる。

滄州基地は、元々第 11 航空学校と称され、1954 年に戦闘飛行学校と改称された。これは学校とは言いながら、必要時には前線に出撃する。鼎新基地は、この点が異なる。鼎新の基本任務は試験のみである。現在、合同戦術訓練センターが設立されたが、訓練は、多数の部隊から臨時に抽出された、いわば寄せ集めの集団で行われる。滄州基地は、建制が固定されている。1979 年、同学校の J-7 戦闘機は中越戦争に参加した。滄州は教材作成のほか、戦法研究も行っている。しかし KDR がよくわからないのは：整備支援の研究、整備関連教材の作成をどこで行っているか？である。理論上、これは当然なされなければならない。最初に 6 個の格納庫だけが建設された。このことは 2018 年に 6 機の J-20 が配備されることを意味する。J-10A が配備された当時の状況から見ると、J-20 は滄州に配備されたあとは、直接戦闘機旅団に大量配備されることになるだろう。それには一定の時間が必要である。

J-10A は 2003 年に滄州に配備されたあと、2004 年、雲南省陸良基地に J-10A の格納庫の建設が開始された。2005 年に最初の J-10A 団の編成が完了した。したがって新型戦闘機は、滄州に配備されたあと、教材及び大綱作成、戦法研究に約 1 乃至 2 年かかる。したがって KDR の推測では、編成完結した最初の J-20 旅団が配備完了するのは 2019 年から 2020 年にかけてであろう。

再度成都の第 132 工場を見てみよう。現在まで、J-20 が大量生産された形跡が見られない。この形跡とは、格納庫の大量建設、J-20 の密集した試験飛行等である。この種の状況は、新型作戦機の生産手順に基本的に符合している。米国、ロシアも同様である。

前号で、KDR はすでに分析したが、米軍の新時代の F-22A、F-35A/B が最優先で日本に配備された。これは J-20 の生産速度にほぼ一致している。現在、12 機の F-22 が日本に固定配備された。その上、海兵隊は F-35B を、空軍は F-35A を配備した。したがって J-20 に対しては、米軍が依然として数も質も優勢である。米空軍内部では、J-20 の大量配備に対処するため、F-22 の生産を回復すべきであると主張する意見がすでに出ている。

以上